

薩摩半島西岸から得られた分布北限記録のシラヌイハタ

中村潤平¹・伊東正英²・本村浩之³¹ 〒 890-0056 鹿児島市下荒田 4-50-20 鹿児島大学大学院水産学研究所² 〒 897-1301 鹿児島県南さつま市笠沙町片浦 718³ 〒 890-0065 鹿児島市郡元 1-21-30 鹿児島大学総合研究博物館

■ はじめに

シラヌイハタ *Epinephelus bontoides* (Bleeker, 1855) は、西太平洋の熱帯・亜熱帯域に散在的に分布する標準体長 50 cm に達する中型ハタ科魚類であり、本科魚類においては珍しく、成魚が河川の汽水域に定着することもある (Randall and Heemstra, 1991; 栗岩ほか, 2008; Heemstra and Myers, 2011; 瀬能, 2013). シラヌイハタの日本国内における報告例は少なく、栗岩ほか (2008) により屋久島から得られた標本に基づき日本から初めて報告され、その後、種子島 (鍋木, 2016), 口永良部島 (木村ほか, 2017), および奄美大島 (桜井, 2018) からのみ記録されている。これらの報告は成魚あるいは若魚の記録に限られており、これまで国内から幼魚の記録はなかった。

2018 年 12 月 22 日に鹿児島県南さつま市笠沙町で第 2 著者により 1 個体のシラヌイハタの幼魚が採集された。本標本は九州沿岸における本種の初めての記録であり、分布北限を更新する記録であるとともに、日本国内における本種の幼魚の初めての記録であるためここに報告する。

■ 材料と方法

計数・計測方法は Randall and Heemstra (1991)

Nakamura, J., M. Ito and H. Motomura. 2019. Northernmost record of *Epinephelus bontoides* (Perciformes: Serranidae) from the west coast of Satsuma Peninsula, Kagoshima Prefecture, southern Japan. *Nature of Kagoshima* 45: 221-224.

✉ HM: the Kagoshima University Museum, 1-21-30 Korimoto, Kagoshima 890-0065, Japan (e-mail: motomura@kaum.kagoshima-u.ac.jp).

Published online: 13 February 2019

http://journal.kagoshima-nature.org/archives/NK_045/045-038.pdf

にしたがった。標準体長は体長または SL と表記し、体各部の計測はデジタルノギスを用いて 0.1 mm までおこなった。シラヌイハタの生鮮時の体色の記載は、固定前に撮影された薩摩半島西岸産の標本 (KAUM-I. 124929) のカラー写真に基づく。標本の作製、登録、撮影、および固定方法は本村 (2009) に準拠した。本報告に用いた標本は、鹿児島大学総合研究博物館 (KAUM) に保管されており、上記の生鮮時の写真は同館のデータベースに登録されている。

■ 結果と考察

Epinephelus bontoides (Bleeker, 1855)

シラヌイハタ (Fig. 1)

標本 KAUM-I. 124929, 体長 42.1 mm, 鹿児島県南さつま市笠沙町貝浜 (31°24'31"N, 130°11'36"E), 水深 0.1 m, 2018 年 12 月 22 日, タモ網, 伊東正英。

記載 背鰭条数 XI, 16; 臀鰭条数 III, 8; 胸鰭軟条数 18; 腹鰭条数 I, 5; 側線有孔鱗数 51; 縦列鱗数 85; 鰓耙数 6 + 14 = 20。

体各部の体長に対する割合 (%) : 頭長 42.8; 吻長 9.0; 体高 31.1; 体幅 13.3; 眼窩径 10.5; 両眼間隔 5.9; 眼下骨高 2.1; 上顎長 18.1; 尾柄高 11.2; 尾柄長 18.5; 背鰭前長 38.0; 臀鰭前長 65.8; 腹鰭前長 38.5; 背鰭基底長 60.8; 背鰭第 1 棘長 6.9; 背鰭第 2 棘長 12.4; 背鰭第 3 棘長 14.0; 背鰭第 4 棘長 14.3; 背鰭第 5 棘長 14.7; 背鰭第 6 棘長 14.7; 背鰭第 7 棘長 14.7; 背鰭第 8 棘長 14.3; 背鰭第 9 棘長 14.3; 背鰭第 10 棘長 14.0; 背鰭第 11 棘長 14.3; 最長背鰭軟条長 (第 6 軟条) 19.5; 臀鰭基底長 19.7; 第 1 臀鰭棘長 7.4;



Fig. 1. Fresh specimen of *Epinephelus bontoides* from the west coast of Satsuma Peninsula, Kagoshima Prefecture, southern Japan (KAUM-I-124929, 42.1 mm SL).

第2 臀鰭棘長 14.7；第3 臀鰭棘長 13.8；最長臀鰭軟条長（第3 軟条）19.2；胸鰭長 25.7；腹鰭棘長 12.6；腹鰭長 20.9.

体は前後方向に長い楕円形で側扁する。体背縁は吻端から背鰭第5 棘起部にかけて盛り上がり、そこから尾鰭基底部にかけて緩やかに下降する。体腹縁は下顎先端から腹鰭起部にかけて緩やかに下降し、そこから臀鰭起部にかけて体軸と平行、臀鰭起部から尾鰭基底部にかけて上昇する。眼は正円形を呈し、瞳孔は体背縁に平行な方向に長い楕円形。鼻孔は2 対で近接し、眼の前方に位置する。前鼻孔後縁に皮弁を有する。後鼻孔には皮弁を欠く。口は端位で口裂は大きい。上顎後端は眼の後縁より僅かに後方に達する。下顎先端は吻端より前方に位置する。両唇は厚い。鰓耙は棒状で細長い。前鰓蓋骨後縁は鋸歯状で、下縁は円滑。鰓蓋後縁は円滑で、鰓蓋上部に3 棘をもつ。体側は中央部のみ櫛鱗に覆われ、体側上部から体背面にかけてと体側下部から腹面にかけては円鱗に覆われる。側線鱗にある小管は分枝せず単一状。両顎、眼の周辺、および胸鰭腋部は無鱗。側線は完全で、鰓蓋後部上方から尾鰭基底部にかけて体背縁と平行にはしる。背鰭起部は鰓蓋後端より前方、背鰭基底後端は臀鰭基底後端より後方にそれぞれ位置する。背鰭各棘間の鰭膜は切れ込む。背鰭軟条部外縁は丸みを帯びる。背鰭棘は第1 棘から第

3 棘まで徐々に長くなり、第3 棘から第11 棘まではほぼ同長である。最長背鰭軟条（第3 軟条）は最長背鰭棘（第5-7 棘）より長い。胸鰭基底上端は背鰭起部より僅かに後方、胸鰭基底下端は腹鰭起部より僅かに前方にそれぞれ位置する。胸鰭後縁は丸く、後端は背鰭第9 棘起部直下に達する。腹鰭起部は鰓蓋後端より前方に位置する。腹鰭第5 軟条は体と鰭膜で繋がる。たんだ腹鰭後端は肛門に達する。臀鰭起部は背鰭第11 棘起部直下、臀鰭基底後端は背鰭第11 軟条起部直下にそれぞれ位置する。臀鰭第2 棘は第3 棘より長い。尾鰭は円形を呈する。

色彩 生鮮時の色彩 (Fig. 1)：体は褐色で、腹部は淡色。各鰭は淡い褐色で、胸鰭、背鰭軟条部、および尾鰭の縁辺は白く縁取られる。頭部の上部約4分の3の領域、腹部を除いた体側、背鰭、臀鰭、および尾鰭に瞳孔より小さい赤褐色斑が散在する。これらの斑点は互によく離れ、背鰭棘部では3 列に列をなす。瞳孔は黒色。

分布 日本、台湾南部、フィリピン諸島、インドネシア、ニューブリテン島、およびソロモン諸島に分布する (Randall and Heemstra, 1991；栗岩ほか, 2008；Heemstra and Myers, 2011；瀬能, 2013)。日本国内では、種子島、屋久島、口永良部島、および奄美大島から報告されており (栗岩ほか, 2008；Motomura et al., 2010；箇木, 2016；

Motomura and Harazaki, 2017; 木村ほか, 2017; 桜井, 2018), 本研究により新たに薩摩半島西岸における分布が確認された。

備考 本標本は背鰭軟条数が16, 胸鰭軟条数が18, 側線有孔鱗数が51, 縦列鱗数が85, 総鰓耙数が20, 尾鰭後縁が丸いこと, 瞳孔より小さい赤褐色斑が頭部の上部約4分の3の領域, 腹部を除いた体側, 背鰭, 臀鰭, および尾鰭に散在すること, および背鰭軟条部, 胸鰭, および尾鰭の縁辺に白色の縁取りがあることなどの特徴により Randall and Heemstra (1991) や栗岩ほか (2008), Heemstra and Myers (2011) の報告した *Epinephelus bontoides* の標徴とよく一致したため本種と同定された。

Epinephelus bontoides は栗岩ほか (2008) により屋久島の宮之浦川河口から得られた1個体 (NSMT-P 77624, 336 mm SL) に基づき日本初記録種として報告され, 標準和名シラヌイハタが提唱された。その後, 屋久島の魚類相をまとめた Motomura et al. (2010) と Motomura and Harazaki (2017) は, 栗岩ほか (2008) で報告された個体に加え, 屋久島町永田から得られた本種2個体 (NSMT-P 96549, 288.6 mm SL, NSMT-P 96550, 317.1 mm SL) を追加で記録した。鎗木 (2016) は種子島で釣獲されたシラヌイハタ (KAUM-I. 70512, 124.0 mm SL) を報告した。木村ほか (2017) は口永良部島からシラヌイハタ (FRLM 53352, 258.0 mm SL) を記録し, 桜井 (2018) により本種 (OCF-P. 20131025-1, 368.0 mm SL) が奄美大島から記録された。

シラヌイハタの国内における分布の記録は上記のもののみであるため, 本報告は本種の九州沿岸における初めての記録であるとともに, 本種の分布北限を種子島から更新するものである。また, これらにより国内から報告されてきたシラヌイハタはすべて体長124.0 mm以上の成魚もしくは若魚であるため, 本報告は国内における本種の幼魚の初めての記録でもある。

シラヌイハタは水深2–30 mの岩礁や礫底, 泥底に生息し (Randall and Heemstra, 1991; Heemstra and Myers, 2011), 栗岩 (2008) により, 本種の

成魚が河口の汽水域にも生息するという, ハタ科魚類において特異的な生態をもつことが明らかにされている。しかし, 本種の幼魚の生態に関しては, 報告例がなく, 生息環境などは不明であった。本研究において記載をおこなった個体は岩が点在する砂地において, 干潮時に岩周辺の窪みに海水が残ったタイドプール状の環境で, 夜間に岩の下で休息しているところを採集された。これらのことから, シラヌイハタの幼魚は, 水深の極めて浅い, 岩が点在する砂浜海岸に生息するものと思われる。

なお, 第2著者による約20年におよぶ薩摩半島西岸の魚類相調査において, 記載標本以外のシラヌイハタは得られておらず, 薩摩半島沿岸における本種の出現は仔稚魚期に黒潮により琉球列島以南の海域から輸送されたことによる, 偶発的なものと考えられる。琉球列島以南の海域と比較し冬季の水温が著しく低い九州沿岸において, シラヌイハタが再生産している可能性は低いと思われる。

■ 謝辞

本報告を取りまとめるにあたり鹿児島大学総合研究博物館ボランティアの皆さまと畑 晴陵氏をはじめとする同博物館魚類分類学研究室の皆さまには多大なるご協力を賜ったため感謝申し上げます。本研究は鹿児島大学総合研究博物館の「鹿児島県産魚類の多様性調査プロジェクト」の一環として行われた。本研究の一部は公益財団法人日本海事科学振興財団「海の学びミュージアムサポート」, JSPS 科研費 (19770067, 23580259, 24370041, 26241027, 26450265), JSPS 研究拠点形成事業—B アジア・アフリカ学術基盤形成型, 国立科学博物館「日本の生物多様性ホットスポットの構造に関する研究プロジェクト」, 文部科学省特別経費「薩南諸島の生物多様性とその保全に関する教育研究拠点整備」, および鹿児島大学重点領域研究環境 (生物多様性・島嶼プロジェクト) 学長裁量経費の援助を受けた。

■ 引用文献

- Heemstra, P. C. and Myers, R. F. 2011. *Epinephelus bontoides* (Bleeker 1855). Pp. 95–96. In: Craig, M. T., Sadovy de Mitcheson, Y. J. and Heemstra, P. C. (eds.) Groupers of the world. A field and market guide. NISC, Grahamstown.
- 鍋木 紘一. 2016. 種子島の釣魚図鑑. たましだ舎, 西之表. 157 pp.
- 木村 祐貴・日比野友亮・三木涼平・峯 健・小枝圭太. 2017. 緑の火山島 口永良部島の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 200 pp.
- 栗岩 薫・原崎 森・瀬能 宏. 2008. 日本初記録のハタ科魚類シラヌイハタ (新称) *Epinephelus bontoides*. 魚類学雑誌, 55: 37–41.
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp. (<http://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/staff/motomura/dl.html>)
- Motomura, H. and Harazaki, S. 2017. Annotated checklist of marine and freshwater fishes of Yaku-shima Island in the Osumi Islands, Kagoshima, southern Japan, with 129 new records. Bulletin of the Kagoshima University Museum, 9: 1–183.
- Motomura, H., Kuriwa, K., Katayama, E., Senou, H., Ogihara, G., Meguro, M., Matsunuma, M., Takata, Y., Yoshida, T., Yamashita, M., Kimura, S., Endo, H., Murase, A., Iwatsuki, Y., Sakurai, Y., Harazaki, S., Hidaka, K., Izumi, H. and Matsuura, K. 2010. Annotated checklist of marine and estuarine fishes of Yaku-shima Island, Kagoshima, southern Japan. Pp. 65–247. In: Motomura, H. and Matsuura, K. (eds.) Fishes of Yaku-shima Island – A World Heritage island in the Osumi Group, Kagoshima Prefecture, southern Japan. National Museum of Nature and Science, Tokyo.
- Randall, J. E. and Heemstra, P. C. 1991. Revision of Indo-Pacific groupers (Perciformes: Serranidae: Epinephelinae), with descriptions of five new species. Indo-Pacific Fishes, 20: 1–322.
- 桜井 雄. 2018. ハタ科. Pp. 81–100. 本村浩之・萩原清司・瀬能 宏・中江雅典 (編), 奄美群島の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島, 横須賀市自然・人文博物館, 横須賀, 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原, 国立科学博物館, つくば.
- 瀬能 宏. 2013. ハタ科. Pp. 752–802, 1960–1971. 中坊徹次 (編), 日本産魚類検索 全種の同定, 第三版. 東海大学出版会, 秦野.